

知的障がい児・者の「働く態度」に関する研究

—「働く態度のチェックリスト」の作成に向けて—

○ 小笠原 拓¹⁾ 岡本 孝伸¹⁾ 伊藤 浩²⁾ 菅野 敦³⁾
1) 株式会社ドコモ・プラスハーティ 2) 社会福祉法人幸会 3) 東京学芸大学
KEY WORDS: 知的障がい 働く態度 チェックリスト

【問題の所在と目的】

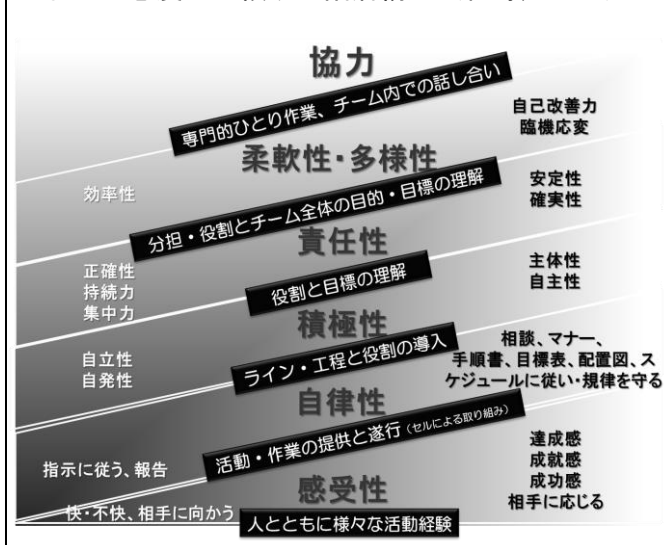
2018年4月に障害者総合支援法や障害者雇用促進法が改正されるなど、障がい者の就労支援のより一層の充実が求められている。

菅野（2015）は知的障がい児・者の作業・就労支援の意義として、「賃金の提供や、生活する力を高めることで、社会的な自立をめざしている」と指摘し、社会的な自立をめざすために、知識や技能に加えて、社会生活に必要な実践的な態度の獲得に向けた支援の必要性を述べている。

そのうえで、菅野（2015）は職業教育における態度として、「感受性」「自律性（受容性）」「積極性」「責任性」「柔軟性・多様性」「協力」から成る「態度の6領域」を挙げ、それぞれの領域の難易度から階層構造を示している（図1）。

この態度の6領域は、変化の激しい現代社会において、自律的かつ多様な環境にも対応しながら、課題を解決するための「生きていくための力」としてとらえることができる。また、6領域の難易度をもとにした「階層構造」という考え方は、支援対象者の実状に応じた段階的な支援を実践するうえで有用な視座であると考えられる。

図1. 態度の6領域の階層構造（菅野，2015）



・「働く態度のチェックリスト」の項目案の検討

菅野（2015）の「態度の6領域」をもとに、知的障がい児・者の作業・就労支援を実践していくためには、支援対象者の実状を把握するためのチェックリストが必要である。

そこで今回、「働く態度のチェックリスト」の作成に向けて、チェックリストの項目に関して検討を行った。

項目づくりにおいては、①各領域の発達の様相の仮説を踏まえること、②幼児期～成人期、重度～軽度知的障がい、といった幅広い対象者に対応することを目指し、社会性の発達に関する先行研究や精神障がいに対するリハビリテーションのプロセスなどを参照した。

以上の作業プロセスから6領域・139項目から成る項目案を作成した。本研究では、この項目案を使った調査を実施し、項目案の妥当性の検証から「働く態度のチェックリスト」の作成に向けた検討を行うことを目的とする。

【方法】

・調査方法：

2018年10～11月に知的障がい児・者の作業・就労支援を行っている特別支援学校、就労継続支援事業所、就労移行支援事業所、特例子会社の支援担当者に「働く態度のチェックリスト」の項目案を配布した。調査実施にあたっては、同意書を送付し、調査対象者から調査協力・発表に関する同意を得た。

各項目の内容について、調査対象者223名（平均年齢22.4歳）の「働く態度」の獲得状況について回答してもらった。

・分析方法：

各項目の内容について、対象者の態度の獲得状況（行動の定着度）によって、「いつもしている（5点）」「よく、している（4点）」「ときどき、している（3点）」「あまり、しない（2点）」「めったに、しない（1点）」というように得点化した。そのうえで以下の分析を行った。

1. 各領域および各項目の平均得点を算出・比較

2. 各項目間の相関係数を算出

これらの分析から項目内容の難易度・重複関係を検討し、「働く態度のチェックリスト」の項目を再構成した。

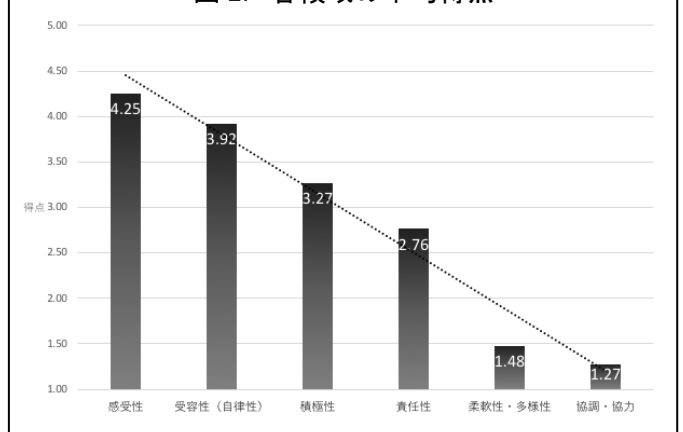
【結果と考察】

1. 各領域および各項目の平均得点

各領域の平均得点を図2に示す。下位から上位の領域に向けて平均得点が低くなっていく（態度獲得の難易度が高くなっていく）傾向が見られ、項目案が菅野（2015）が提唱する「態度の6領域」の階層性を示すことができていると考えられる。一方で、「責任性」から「柔軟性・多様性」「協調・協力」にかけて平均得点の差が大きく、特に上位2領域の項目内容の難易度の設定に課題があると考えられる。

また、各項目の平均得点を比較すると、階層構造が逆転している項目も見られ、これらの項目も難易度の設定を検討する必要がある。

図2. 各領域の平均得点



2. 各項目間の相関係数

各領域内の項目間に強い相関係数（相関係数0.7以上）が見られ、項目内容が重複していることが予測され、これらの項目の統合を検討する必要がある。

以上の分析結果をもとに、「働く態度のチェックリスト」を6領域・42項目に再構成した。